

郷音

こころ

東京福祉会だより

第81号 (通刊104号) 平成30年1月発行

“響”とは「郷」の「音」と書きます。私ども東京福祉会では、この温かなものを大切に「心に響く葬儀」を目指しております。



今号の
エッセイ

「家族の命がけのサポート」

プロスキーヤー・冒険家
クラーク記念国際高等学校校長 三浦 雄一郎 氏

ワンポイント
アドバイス

“知っておきたい”ワンポイントアドバイス
「神葬祭」について

新年のご挨拶／ご葬儀エピソードのご紹介／平成29年度 物故者永代慰霊法要 御礼と報告／東京福祉会からのお知らせ

東京福祉会だより(響)は、個人・団体会友や当会をご利用いただいた皆様をはじめ、都内の各福祉事務所・施設などにお届けしております。

大正8年創立



社会福祉法人 **東京福祉会**

新年のご挨拶



社会福祉法人東京福祉会

理事長 原山 陽一

新年明けましておめでとございます。
2018年の年頭にあたり、謹んで新春
のお慶びを申し上げます。

皆様におかれましては、健やかに新年
をお迎えになられたことと存じます。社
会福祉法人東京福祉会も、1919年
11月の創立以来99回目の春を迎え、大き
な節目となる100周年が目前となつてまい
りました。これもひとえに皆様方のご支
援とご指導の賜物と、心より厚く感謝申
し上げます。

さて、昨年4月には、経営組織のガバ
ナンス強化、事業運営の透明性の向上、
財務規律の強化、地域における公益的な
取組の実施を柱とする改正社会福祉法
が本格施行されました。

これに対応して、東京福祉会において
も運営体制の整備を行いました。今後も、
社会福祉法人が果たすべき役割と責務
を自覚し、法人運営に努めてまいります。

葬儀を取り巻く状況としては、人口減
少・少子高齢化という社会構造の変化に
伴い、簡素化・小規模化が進んでおります。
一方で、人と人との絆を再確認する機
会として、葬儀の意義を見直そうという
論調も見られます。また自分自身の人生
後半期と向き合い、そのあり方を考え、
葬儀についてもあらかじめ決めておこう
とする方々も増えていきます。このよう
な様々なニーズに対応し、どのような方
にも安心をお届けできるようにしていくこ
とが重要になっていきます。

東京福祉会では、ホームページや広報
誌、あるいは施設見学会等でご葬儀につ
いての情報提供をすすめると共に、もし
もの時には故人の尊厳を尊重し、「その
人らしい」ご葬儀となるよう職員一人一人
が自覚を持ってご奉仕してまいりたいと
考えております。

今年の干支は戊戌(つちのえいぬ)で
す。犬は感覚がとても鋭く、嗅覚は人間
の数千から一億倍、聴覚は人間の4から
10倍といわれております。

当会も戌年にちなみ、見えている事だ
けに注意を払うのではなく、皆様の声に
耳を傾け、お心の内を読み解く感覚を
養って、業務に当たってまいります。

今後も地域福祉・地域社会に貢献で
きるよう職員一同真摯に取り組んでま
いりますので、変わらぬご指導、ご鞭撻を
賜りますようお願い申し上げます。

ご葬儀エピソード 〜ホームページより〜

東京福祉会では、お手伝いさせて頂いたご葬儀でのエピソードを、ホームページにてご紹介しております。今回は、その一部を誌上でご紹介いたします。

奥様へのプレゼントを持って

とある故人様は、出かけることが好きだったそうです。

特に、先に亡くなられた奥様とは、桜の季節にはお花見に、また5月には自宅近くの植物公園でバラの香りを楽しむなど、良く花を見に一緒に出掛けていたというお話をうかがいました。

花で結ばれたご夫婦の絆を知り、何か出来ないかと思っていたところ、通夜のお勤めを終えたお寺様より、このようなご法話がありました。



「故人は極楽浄土へと旅立たれますが、そこには奥様が待っていてくれます。この先は一人で仲良く、残された皆さんを見守ってください。故人にとっても皆さんにとっても別れは悲しいことですが、悲しみの先には幸せも待っているですよ」

このご法話にヒントを得て、ご家族から故人様へ、そして故人様から浄土におられる奥様へと贈っていただくためのバラの花を用意させていただきました。

「お母さんに渡してあげてね」
「入院してから出かけられなかったけど、また花を見られてよかったね」

と言葉を掛けながらお花入れをされる皆様の中には、お打ち合わせの時にはなかった涙が浮かんでいました。

ご葬儀は、結婚式と違いとても短い日数で打ち合わせからご火葬までが過ぎていきます。

慌ただしい葬儀の準備の中で気を張り詰めている家族の皆様、故人様を偲び、絆を感じ、冥福を祈

る時間をご提供できること、悲しみの中にも温かみを感じられる葬儀が出来るよう、今後も努めていきたいと思えます。

想い出の校歌

あるご葬儀では、会葬礼状の文章をご長女様がお書きになりました。

最近是在りし日のお姿や思い出を綴る「オリジナル会葬礼状」を希望される方が増えています。その文章は専門スタッフが作成するほか、ご家族に書いていただくこともできるのです。

完成した礼状には、おじい様が明治大学で教鞭をとっていたこと、故人様もそこで学び、奥様と出会いの場ともなったこと、更には大学を仕事場として職務に邁進してきたこと。

なにより、故人様にとって明治大学で働き、お子様方も含め家族全員が明治大学の出身者として活躍できたことは、他に代え難い誇りであった、ということが記されていました。

——ご出棺の際には、明治大学の校歌を流そう！
明治大学が故人様だけでなくご

家族の皆様にとって特別な存在である、そう直感しました。

お別れの場面で明治大学の校歌が流れると、喪主を務めたご長男様の「まさか校歌が聞けるとは思わなかったなあ」というつぶやきが聞こえました。ご家族だけではなくご親族の皆様も校歌を口ずさんでいて、ご親族でも明治大学出身の方が多かったようです。

中には、最近体調が優れずお話しすることも難しくなっていたというご親族様までが歌っていて、皆様驚いておられました。

校歌を流したことが、ご家族の思いが重なり合うきっかけになったのではないかと思います。

こういった瞬間に立ち会えることは、この仕事の大きなやりがいです。これからも、この温かい葬儀の場を提供できるよう、努力していきたいと思えます。



家族の命がけのサポート

プロスキーヤー・冒険家、クラーク記念国際高等学校校長

三浦雄一郎

70歳を越えてエベレストの頂上に立ってみたい。そう思い始め、夢を抱き始めたのが冒険の世界から一旦リタイアしていた65歳の時だった。

この頃の体重は90kg近く、身長は164cm。立派なデブ、肥満体であり、どうせならもっと太ってみよう。とことんグウタラを続ければ身体は成人病になるのだろうか。本気でそんなことを考えていた。

鈍った身体になるのに努力は要らない。私が住む札幌では美味しいビールや焼肉など、いくらでも飲み放題、食べ放題。こうした生活をこの10年ほどやってきたのだから、「三浦さん太られましたね」と、誰に会っても言われてしまう。プロスキーヤーとして、ときには「冒険家」などと呼ばれてテレビに引っ張り出されると、そのたびに冷や

汗をかいたり、良心がとがめたりしながらボソボソ昔の話などしていた。

人には、こんな自分から抜け出してみたいという変身願望がある。デブならそこから抜け出してスマーтона若者時代のボディに戻ってみたい。そうは思っても、すっかりグウタラな生活に慣れきってしまったから、二年、三年と過ぎてゆく。

そのうちに、自分の家の二階の階段を上がるのすらしんどくなる。それだけならいいけど、人には言いえない悩み：明け方フトンの中でもたもたしている、背中が気持ち悪くなる。とたんに心臓が悪魔につかまれたように痛くなる。もう狭心症の発作まで起きていた。とうとう先輩のドクターのところでは検査を受けさせられた。結果、このままでは余命三年。自分自身でもなんとなくそうで

はないかと思いい、それどころか明朝のまま冷たくなっていてもおかしくないぐらいの、まあそのころポックリ病と呼ばれていた死に方をするのではないかと感じていた。それにしても、あと三年の命とは情けない、まだ65歳だった。

その頃、私の父、敬三は「99歳になったらモンブランをスキーで滑る」と言って元氣一杯、スキーシーズン中は国内外の山々で山岳スキーをやり、シーズンが終わって東京に帰っても毎日ウォーキングやら体力づくりに励んでいた。（結果として、99歳で本当にモンブランの氷河30kmを滑って世界を驚かせた）、目標をもって進む父の姿を見て、「よし、オヤジがモンブランなら、俺はエベレストを登ってみよう」と奮起した。

まず最初にひそかに札幌の我が家

のそばにある標高500mの藻岩山を登ってみた。ところがゆるい登山路

を5分も登らないうちに、心臓はバクバク苦しくなり、冷や汗が出てくるわ、脚はつってくる。それでも頑張つて馬の背まで登つたけれどこれが限度だった。息子達なら十分もしないでそこから山頂へ走つて登るのに。

65歳、こんな状態でどうやってエベレストへ？気が遠くなるような思いだった。しかし、この生活習慣を抱えたデブの体を何とかしなければ…私の70歳のエベレスト登頂はこんなところからのスタートだった。

それから自分で考え出したヘビウォーキング、つまり脚に1kgの重りと背中に10kgのザックをかついで散歩したり仕事に出かけたりした。2年目から3kgづつ、3年経って5kg、そしてとうとう片足10kg、背

中に30kgを背負って歩けるようになった。3年目、この頃は気がついたら病気らしきものがいつの間にか消えていた。不思議なもので、人生に「目標」を持つことで心も身体も元気になっていく。

どうせ死ぬんだから死んだ気でやれば、そんな気になっていた。死んだ気になってやっているうちに、とうとう70歳でエベレストの頂上に立った。

75歳のエベレストは、心臓の不整脈がひどくなった。ほとんどの心臓の専門家達はもうやめなさいとおっしゃる。運良く家坂義人先生という土浦協同病院の名医と出会い、2回の手術で回復、やっとの思いで75歳のエベレストの頂上に立つことが出来た。

そして80歳でのエベレスト。これはもっとひどい目にあった。76歳のときスキー場での事故で左の大腿骨付根と骨盤の5ヶ所の骨折、70代後期での大怪我は回復不可能で良くて車椅子生活と思われた。ある意味で家族はやれやれ、これでエベレストを諦めてくれるのではと安心(?) したと言った。

ところが私はなんとしても80歳で登るんだ。この強い気持ちで回復を促したのか、運よく歩けるように

なった。しかし出発半年前のヒマラヤのトレーニングで心臓の不整脈が再び悪化し、出発ぎりぎりの4度目の手術を行う。まわりはこれでもう山登りは不可能だ、それなら想い残すことなく行けるところまで登って帰ってくれば良い...と感じていた。それでも私は諦めず、そのときふと、「年寄り半日仕事」と言う言葉が浮かんできた。そうだ、今までの登山の行程を半分づつにしてみよう。これが手術のリハビリにもなり、とうとう80歳で三度目のエベレスト登頂を成し遂げた。

しかしよくよく考えてみると、これは家族全員のサポートがあったからだ。我が家では誰かが何かやるうとする、全員で精一杯サポートすることにいつの間にかなっている。これは家族で旅行や登山をしたり、それもかなり大掛かりなヒマラヤや南極まで含めて危険、困難なことを力を合わせて登ったり旅を続けたりしてきた。これは家族の一人ひとりが限界までのベストを尽くしながら協力し合わなければならぬ。そして無事成し遂げた時の湧き上がるような達成感。これを繰り返しやることでの家族の連帯感、絆が深まってきた。

次男の豪太は3回のエベレストの

チャレンジに、いつも命がけて父親をサポートし続けてくれた。75歳の私の二度目のエベレストで、豪太は超高山の8000m地点で重篤な高山病に陥り、「120%死んでいる」と医師たちから言われた状況から、運よく生還できた。この豪太の生還が無かつたら私の75歳のエベレスト登頂は無かつた。

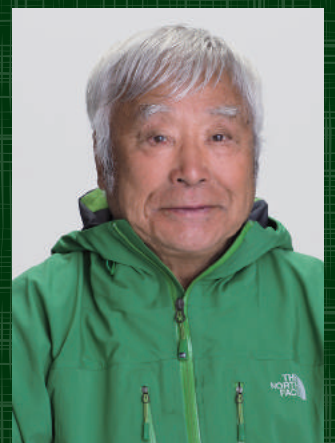
生と死のきわどい世界に、家族を巻き込むなんて心が痛むことがある。しかし我が家の全員、それぞれの分野でのベストを尽くして私をサポートし続けてくれている。

2018年、私は85歳でチョー・オユー(標高8201m)世界第6位の高峰からのスキー滑降を目指している。こんな突拍子もない挑戦に、家族のみんなは再びサポートしてくれる。

70歳、75歳、80歳...3度のエベレスト登頂には家族の心と力を集めたパワー、沢山の方々の応援。

そして無我夢中に山頂へ向かうときご先祖様をはじめ大自然の大きな不思議な力が私を押し上げてくれた。

人生、命を懸けられる生きがいを持つことは幸せだ。そして支えてくださる大きな存在に心から感謝を。



三浦 雄一郎 (みうら ゆういちろう)

1932年青森市に生まれる。1964年イタリア・キロメートルランセに日本人として初めて参加、時速172.084キロの当時の世界新記録樹立。1966年富士山直滑降。

1970年エベレスト・サウスコル8,000m世界最高地点スキー滑降を成し遂げ、その記録映画[THE MAN WHO SKIED DOWN EVEREST] はアカデミー賞を受賞。

1985年世界七大陸最高峰のスキー滑降を完全達成。2003年次男(豪太)とともにエベレスト登頂、当時の世界最老年齢登頂記録(70歳7ヶ月)樹立。

2008年、75歳2度目、2013年80歳にて3度目のエベレスト登頂(世界最老年齢登頂記録更新)を果たす。アドベンチャー・スキーヤーとしてだけでなく、全国に1万人以上生徒がいる広域通信制高校、クラーク記念国際高等学校の校長も務める。記録映画、写真集、著書多数。

(株)ミウラ・ドルフィンズ 代表取締役、クラーク記念国際高等学校校長、(社)全国森林レクリエーション協会会長、NPO法人グローバル・スポーツアライアンス理事長、厚生労働省いきいき健康大使、国連WFP協会親善大使 他

平成29年度

物故者永代慰霊法要

御礼と報告



東京福祉会では、去る10月25日に練馬区の江古田斎場、10月31日には国立市のホール多摩国立におきまして、聖恩山霊園納骨物故者永代慰霊法要を、聖恩山霊園 堀内是長導師の読経のもと執り行いました。

慰霊法要には、各福祉事務所と各施設の皆様にご参列いただき、そして当会からも理事長を始め役員、職員が参列いたしました。

江古田斎場では、東京都福祉保健局 次長 山岸徳男様に、ホール多摩国立では、東京都福祉保健局 生活福祉部 保護課長 野村泰洋様にそれぞれ丁寧なる御挨拶を賜りました。

慰霊法要の後には、各式場内をご案内させていただきました。実際に使用する葬具や納骨堂及び霊安室などを見学していただき、皆様から様々なご質問をいただきました。当会の事業へのご理解を一層深めていただけたのではないかと思います。

また、参列された方々の故人様をお送りされた思いが感じられ、ご案内をさせていただいた私共も改めて気の引き締まる思いでありました。

今後も各福祉事務所、各施設の皆様より託された御霊を、心を込めてお守りしていく所存でございます。

ご関係の皆様におかれましては、ご多忙とは存じますが、是非とも年に一度の法要にご参列を賜りますようお願い申し上げます。最後となりますが、ご参列いただきました皆様方には、この場をお借りいたしまして心より御礼申し上げます。



東京都福祉保健局長 山岸 徳男 氏



東京都福祉保健局 生活福祉部 保護課長 野村 泰洋 氏



社会福祉法人 東京福祉会 理事長 原山 陽一 氏

知っておきたい ワンポイント アドバイス!

第9回

「神葬祭」について

人生の節目で訪ねることの多い神社ですが、ご葬儀に於いては、神道は全体の2割と言われています。

今回は、「神葬祭」についての想いを、神職の方にお伺いしました。

親族との永訣の 時をむかえる、その人達の 「こころ」に真摯に接したい

親族との別れには、病のように忍び寄ってくることもあれば、突然の訃報に接する場合など様々な形があります。どのような形であれ、その時をむかえ天涯の孤愁を感じつつある人に、神葬祭という「かたち」をもって、私どもの奉仕の「こころ」を

伝えたいと思っています。日々の神明奉仕と同じく、神葬祭においても真心を込めて神前(霊前)に臨んでおります。当然の種々な相違はあっても、神職奉仕の姿勢は全く変わることはありません。

● ● ● ● ● ●
日常私どもは、地域の守り神、生業を営む場に鎮まります神々に、諸々の災厄なきようにとの祓(はら)を行っております。そして初宮詣(ゆりかご)から葬儀(墓場)まで、氏子・崇敬者の篤き信仰精神のもとに、その「こころ」をゆだね、大切に時を過ごしています。

● ● ● ● ● ●
誰しもがこの一日一日を過ごす中で、身内への大きな波をこうむり、別れを受け入れざるを得ない局面を迎えます。そして悲しみと驚きの中、直後から執り進めなければいけない数多のことが押し寄せてまいります。葬家となった親族として、出来る限りの「かたち」を選択し、関係者のアドバイスを受けながらも、葬儀行事の一つ一つに自身の「こころ」をこめてゆこうと考えを持つことが大切です。

● ● ● ● ● ●
神葬祭の二連の行事とその次第には、確固たる考え方、厳然たる慣習

● ● ● ● ● ●
に基づき神葬祭式同行事があります。奉仕の神職は、形作られている次第や作法を大切にしようとする一方、地域性や歴史に基づく慣習、つまり現代人の風潮・時流に沿った「かたち」にゆだねることもしてきました。

● ● ● ● ● ●
永遠の別離を思い、悲しみのうち
に時を過ごして仮通夜(納棺等)を経
ての通夜祭、そして相前後すること
はあるものの、「御霊」を「御霊壘」へ
とお還しする「遷霊の儀」へと執り進
めます。次には、ご霊前に置いて神葬
祭儀の中心である「葬場祭」へと進み、
続いては出棺、火葬祭が執り行なわ
れて、「御遺骨」の拾骨。その後、十日
祭を始めとする、節目の「霊祭」、「納
骨」を行い、「日」から「年」への時期に
は、「年祭」をこころを込めて行う
——神葬祭は、現代では、おおむねこ
のように執り進められております。

● ● ● ● ● ●
私どもは、葬家のご意向をふまえ、
地域の慣習や、時流と許容の範囲を
考え、融合させることもいたしますが、
基本である「こころ」を忘れてはなら
ないと思っています。参列者を含めて、
「祓」に始まり、「祓」に終わる、「こころ」
を清めてゆくといいことを、特に
厳かに執り行ないます。

● ● ● ● ● ●
幽界(死後の世界)と明界(現世)、
まさに、幽明境を異にした直後の葬
家や親族の思いを出来る限り汲み
取り、限られた時間の中でも、その準
備から取り納めまでの事に心を沿わ
せる、奉仕神職の本分を今後とも大
事にしてゆきたいと考えています。

● ● ● ● ● ●
「慰霊」、つまりは故人や先祖代々の御霊となごみあう「こころ」はとても大切です。宗祀宗派の別なく言われて久しい昨今ですが、葬儀の際に「まことのこころ」を捧げる姿勢は、共通項であると思います。

● ● ● ● ● ●
「こころ」を「かたち」に、「かたち」を「こころ」に通わず、時代が移りかわっても、奉仕の「こころ」が揺らがないよう、巡り来る神葬祭に臨んでゆきたい次第です。

(執筆 阿佐ヶ谷神明宮)



東京福祉会からのお知らせ

人形・ぬいぐるみ供養のご案内

日本では古くから、物には生命が宿り、人形には心があると考えられてきました。

その想いは現代にも引き継がれ、大切なお人形を無下に手放すことが出来ない方が多いようです。

皆様のお部屋にも、役目を終えたお人形が眠っていませんか？

お子様の成長を見守ってきたお雛様や五月人形、おともだちとして一緒に過ごしてきたぬいぐるみ…そんな優しい絆で結ばれたお人形達を「感謝」の気持ちで見送りましょう。

東京福祉会では、僧侶の読経による人形供養を、真心を込めて執り行ないます。

■受付方法

預かり期間内に、各直営斎場にお人形をご持参ください(無料)。

お人形であれば、素材や数量は問いません。また、ガラスケース等が付属する場合、ケースごとお預かりいたします。

※申し訳ございませんが、郵送によるお預かりはいたしかねます。

【お預かり期間】

平成30年2月1日(木)～15日(木)

9時～16時

【お預かり場所】

道灌山会館、江古田斎場、ホール多摩国立
(左記住所)

【お預かり費用】

無料

■法要開催日

平成30年2月17日(土) 11時～12時

於 江古田斎場

僧侶による読経と、皆様のお焼香によって供養させていただきます。

人形のお預かりのみでも承りますが、都合がよろしければ是非法要に足をお運びください。



お預かり場所

- 道灌山会館 文京区千駄木3-52-1
- 江古田斎場 練馬区小竹町1-61-1
- ホール多摩国立 国立市谷保892-1

資料請求

ご葬儀に関する詳しい資料をご用意しています。下記連絡先までお気軽にご請求ください。

- ① 葬祭料金のご案内
- ② 道灌山会館限定
家族葬プランのご案内
- ③ ホール多摩国立限定
シルクフラワー祭壇のご案内
- ④ ご火葬のみプランのご案内
- ⑤ 道灌山会館のご案内
- ⑥ 江古田斎場のご案内
- ⑦ ホール多摩国立のご案内
- ⑧ 聖恩山霊園のご案内
- ⑨ 会友制度Bプランのご案内
- ⑩ エッセイ集 響の縁



お問い合わせ・お申し込み

〈電話〉 ☎0120-00-5677 東京福祉会 渉外部

〈E-mail〉 info@fukushikai.com

〈URL〉 http://www.fukushikai.com

東京福祉会

検索



「東京福祉会だより(響)」は再生紙を使用しています。